

学習指導要領における自立活動の内容

1 健康の保持 生命を維持し,日常生活を行うために必要な健康状態の維持・改善を身体的な側面を中心として図る観点
※ 障害の特性を理解することについて,生活環境を調整するための具体的な側面に比重がかかっている。

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	体温の調節,覚醒と睡眠など健康状態の維持・改善に必要な生活リズムを身に付けること,食事や排泄などの生活習慣の形成,衣服の調節,室温の調節や換気,感染予防のための清潔の保持など健康な生活環境の形成を図ること。	ADHD :周囲のことに気が散りやすいことから一つ一つの行動に時間がかかり,整理・整頓などの習慣が十分に身に付いていないことがある。 ➡個々の幼児児童生徒の困難の要因を明らかにした上で,無理のない程度の課題から取り組むことが大切。	自閉症 :自分の体調がよくない,悪くなりつつある,疲れているなどの変調が分からずに,無理をしてしまうことがある。その結果,体調を崩したり,回復に非常に時間がかかったりすることがある。この原因としては,興味のある活動に過度に集中してしまい,自分のことを顧みることが難しくなる。自己を客観的に把握することや体内の感覚を自覚することなどが苦手だということが考えられる。 ➡気になることがあっても,就寝時間を守るなど,規則正しい生活をするための大切さについて理解したり,必要に応じて衣服を重ねるなどして温度に適した衣服の調節をすること身に付けたりすることが必要。 ○体調の管理に関する指導については「3人間関係の形成」,「4環境の把握」,「6コミュニケーション」等の区分と関連させる。
(2)	病気の状態の理解と生活管理に関すること	自分の病気の状態を理解し,その改善を図り,病気の進行の防止に必要な生活様式についての理解を深め,それに基づく生活の自己管理ができるようにすること。	てんかん :生活のリズムの安定を図ること,過度に疲労しないようにすること,忘れずに服薬することなどが重要。定期的な服薬により発作はコントロール出来ることが多いが,短時間意識を失う小発作の場合には,発作が起きているのを本人が自覚しにくいことから,自己判断して服薬を止めてしまうことがある。 ➡定期的な服薬の必要性について理解させるとともに,確実に自己管理ができるよう指導する必要がある。	てんかん :発作は,多様であるため,身体症状だけでは分かりにくいことがある。そのため,発作が疑われるような行動が見られた場合は,専門の医師に相談する必要がある。定期的な服薬の必要性について理解するとともに,服薬により多くの場合は発作をコントロールできるという安心感をもたせることも重要。注意事項を守り服薬を忘れないようにするためには,周囲の人の理解や協力を得ることが有効な場合がある。幼児児童生徒の発達の段階等に応じて,自分の症状を他の人に適切に伝えることができるようにすることも大切。 ➡病気の状態の理解を図り,自発的に生活管理を行うことができるようにすることが必要。 ○「2心理的安定」や「6コミュニケーション」等の区分と関連させる。
(3)	身体各部の状態の理解と養護に関すること	病気や事故等による神経,筋,骨,皮膚等の身体各部の状態を理解し,その部位を適切に保護したり,病状の進行を防止したりできるようにすること。		
(4)	障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること	自己の障害にどのような特性があるのか理解し,それらが及ぼす学習上又は生活上の困難についての理解を深め,その状況に応じて,自己の行動や感情を調整したり,他者に対して主体的に働きかけたりして,より学習や生活をしやすい環境にしていくこと。	自閉症 :感覚の過敏さやこだわりがある場合,大きな音がしたり,予定通りに物事が進まなかったりすると,情緒が不安定になることがある。 ➡自分から別の場所に移動したり,音量の調整や予定を説明してもらうことを他者に依頼したりするなど,自ら刺激の調整を行い,気持ちを落ち着かせることができるようにすることが大切。 LD・ADHD :学習や対人関係が上手くいかないことを感じている一方で,自分の長所や短所,得手不得手を客観的に認識することが難しかったり,他者との違いから自分を否定的に捉えてしまったりすることがある。 ➡個別指導や小集団などの指導形態を工夫しながら,対人関係に関する技能を習得するなかで,自分の特性に気付き,自分を認め,生活する上で必要な支援を求められるようにすることが大切。	
(5)	健康状態の維持・改善に関すること	障害のため,運動量が少なくなったり,体力が低下したりすることを防ぐために,日常生活における適切な健康の自己管理ができるようにすること。	自閉症 :運動量が少なく,結果として肥満になったり,体力低下を招いたりする者も見られる。また,心理的な要因により不登校の状態が続き,運動量が極端に少なくなったり,食欲不振の状態になったりする場合もある。このように,障害のある幼児児童生徒の中には,障害そのものによるのではなく,二次的な要因により体力が低下する者も見られる。 ➡体力低下を防ぐためには,運動することへの意欲を高めながら適度な運動を取り入れたり,食生活と健康について実際の生活に即して学習したりするなど,日常生活において自己の健康管理ができるようにするための指導が必要。	

2心理的な安定

自分の気持ちや情緒をコントロールして変化する状況に適切に対応するとともに、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する意欲の向上を図り、自己のよさに気付く観点

※主体的に障害に対する困難を乗り越えようとする心理的な面、つまり意欲を高めることに対する働きかけを重視している。

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	情緒の安定に関すること	情緒の安定を図ることが困難な幼児児童生徒が、安定した情緒の下で生活できるようにすること。	障害のある幼児児童生徒:生活環境などの様々な要因から、心理的に緊張したり不安になったりする状態が継続し、集団に参加することが難しくなることがある。 ➡環境的な要因が心理面に大きく関与していることも考えられることから、睡眠、生活のリズム、体調、天気、家庭生活、人間関係など、その要因を明らかにし、情緒の安定を図る指導をするとともに、必要に応じて環境の改善を図ることが大切。 自閉症:他者に自分の気持ちを適切な方法で伝えることが難しい場合、自ら自分をたたいてしまうことや、他者に対して不適切な関わり方をしてしまうことがある。 ➡自分を落ち着かせることができる場所に移動して、慣れた別の活動に取り組むなどの経験を積み重ねていきながら、その興奮を静める方法を知ることや、様々な感情を表した絵カードやメモなどを用いて自分の気持ちを伝えるなどの手段を身に付けられるように指導することが大切。 ADHD:自分の行動を注意されたときに、反発して興奮を静められなくなることがある。 ➡自分を落ち着かせることができる場所に移動してその興奮を静めることや、いったんその場を離れて深呼吸するなどの方法があることを教え、それらを実際に行うことができるように指導することが大切。 ADHD:注意や集中を持続し、安定して学習に取り組むことが難しいことがある。 ➡刺激を統制した落ち着いた環境で、必要なことに意識を向ける経験を重ねながら、自分に合った集中の仕方や課題への取り組み方を身に付け、学習に落ち着いて参加する態度を育てていくことが大切。 LD:読み書きの練習を繰り返し行っても、期待したほどの成果が得られなかった経験などから、生活全般において自信を失っている場合がある。そのため、自分の思う結果が得られず感情的になり、情緒が不安定になることがある。 ➡本人が得意なことを生かして課題をやり遂げるように指導し、成功したことを褒めることで自信をもたせたり、自分のよさに気付くことができるようにしたりすることが必要。 チックの症状:不安や緊張が高まった状態になると、身体が動いてしまったり、言葉を発してしまったりすることがある。 ➡不安や緊張が高まる原因を知り、自ら不安や緊張を和らげるようにするなどの指導をすることが大切。	
(2)	状況の理解と変化への対応に関すること	場所や場面の状況を理解して心理的抵抗を軽減したり、変化する状況を理解して適切に対応したりするなど、行動の仕方を身に付けること。	選択性かん黙:特定の場所や状況等において緊張が高まることなどにより、家庭などではほとんど支障なく会話ができるものの、特定の場所や状況では会話ができないことがある。 ➡本人は話したくても話せない状態であることを理解し、本人が安心して参加できる集団構成や活動内容等の工夫をしたり、対話的な活動を進める際には、選択肢の提示や筆談など様々な学習方法を認めたりするなどして、情緒の安定を図りながら、他者とのやりとりができる場面を増やしていくことが大切。 自閉症:日々の日課と異なる学校行事や、急な予定の変更などに対応することができず、混乱したり、不安になったりして、どのように行動したらよいか分からなくなることがある。 ➡予定されているスケジュールや予想される事態や状況等を伝えたり、事前に体験できる機会を設定したりするなど、状況を理解して適切に対応したり、行動の仕方を身に付けたりするための指導をすることが大切。 自閉症:周囲の状況に意識を向けることや経験したことを他の場面にも結び付けて対応することが苦手なため、人前で年齢相応に行動する力が育ちにくいことがある。 ➡行動の仕方を短い文章にして読むようにしたり、適切な例を示したりしながら、場に応じた行動の仕方を身に付けさせていくことが大切。	自閉症:特定の動作や行動に固執したり、同じ話を繰り返したりするなど、次の活動や場면을切り換えることが難しいことがある。このようなこだわりの要因としては、自分にとって快適な刺激を得ていたり、不安な気持ちを和らげるために自分を落ち着かせようと行動していたりしていることが考えられる。 ➡特定の動作や行動等を無理にやめさせるのではなく、本人が納得して次の活動に移ることができるように段階的に指導することが大切。その際、特定の動作や行動を行ってもよい時間帯や回数をあらかじめ決めたり、自分で予定表を書いて確かめたりして、見通しをもって落ち着いて取り組めるように指導することが有効。 ○本人が納得して次の活動に移ることができるような指導については、「3人間関係の形成」、「4環境の把握」等の区分と関連させる。
(3)	障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること	自分の障害の状態を理解したり、受容したりして、主体的に障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲の向上を図ること。	LD:数字の概念や規則性の理解や、計算することに時間がかかったり、文章題の理解や推論することが難しかったりすることで、自分の思う結果が得られず、学習への意欲や関心が低いことがある。 ➡自己の特性に応じた方法で学習に取り組むためには、周囲の励ましや期待、賞賛を受けながら、何が必要かを理解し、できる、できたという成功体験を積み重ねていくことが大切。 障害に起因して心理的な安定を図ることが困難な状態にある幼児児童生徒:同じ障害のある者同士の自然なかかわりを大切にしたり、社会で活躍している先輩の生き方や考え方を参考にできるようにして、心理的な安定を図り、障害による困難な状態を改善・克服して積極的に行動しようとする態度を育てることが大切。	LD:文章を読んで学習する時間が増えるにつれ、理解が難しくなり、学習に対する意欲を失い、やがては生活全体に対しても消極的になってしまうことがある。このようなことになる原因としては、漢字の読みが覚えられない、覚えてもすぐに思い出すことができないなどにより、長文の読解が著しく困難になること、また、読書を嫌うために理解できる語彙が増えていかないことも考えられる。 ➡振り仮名を振る、拡大コピーをするなどによって自分が読み易くなることを知ることや、コンピュータによる読み上げや電子書籍を利用するなどの代替手段を使うことなどによって読み取りやすくなることを知ることについて学習することが大切。また、書くことの困難さを改善・克服するためには、口述筆記のアプリケーションやワープロを使ったキーボード入力、タブレット型端末のフリック入力などが使用できることを知り、自分に合った方法を習熟するまで練習することなども大切。これらの使用により、学習上の困難を乗り越え、自分の力で学習するとともに、意欲的に活動することができるようにすることが大切。こうした代替手段等の使用について指導するほか、代替手段等を利用することが周囲に認められるように、周囲の人に依頼することができるようになる指導も必要。 ○障害による学習上の困難を改善・克服する意欲に関する指導については、この項目と「4環境の把握」、「6コミュニケーション」等の区分と関連させる。

3 人間関係の形成 自他の理解を深め、対人関係を円滑にし、集団参加の基盤を培う観点
※ 集団の中における自己、集団との相互関係における自己理解や自己の行動の調整などを意味している。

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	他者とのかかわりの基礎に関すること	人に対する基本的な信頼感をもち、他者からの働き掛けを受け止め、それに応ずることができるようになること。		
(2)	他者の意図や感情の理解に関すること	他者の意図や感情を理解し、場に応じた適切な行動をとることができるようにすること。	自閉症 :言葉や表情、身振りなどを総合的に判断して相手の思いや感情を読み取り、それに応じて行動することが困難な場合がある。また、言葉を字義通りに受け止めてしまう場合もあるため、行動や表情に表れている相手の真意の読み取りを間違えることもある。 ➡生活上の様々な場面を想定し、そこでの相手の言葉や表情などから、相手の立場や相手が考えていることなどを推測するような指導を通して、他者と関わる際の具体的な方法を身に付けることが大切。	
(3)	自己の理解と行動の調整に関すること	自分の得意なことや不得意なこと、自分の行動の特徴などを理解し、集団の中で状況に応じた行動ができるようになること。	ADHD :衝動の抑制が難しかったり、自己の状態の分析や理解が難しかったりするため、同じ失敗を繰り返したり、目的に沿って行動を調整することが苦手だったりすることがある。 ➡自分の行動とできごととの因果関係を図示して理解させたり、実現可能な目当ての立て方や点検表を活用した振り返りの仕方を学んだりして、自ら適切な行動を選択し調整する力を育てていくことが大切。 障害のある幼児児童生徒 :経験が少ないことや課題に取り組んでもできなかった経験などから、自己に肯定的な感情をもつことができない状態に陥っている場合がある。その結果、活動が消極的になったり、活動から逃避したりすることがあるので、早期から成就感を味わうことができるような活動を設定するとともに、自己を肯定的に捉えられるように指導することが重要。	自閉症 :自分の長所や短所に関心が向きにくいなど、自己の理解が困難な場合がある。また、「他者が自分をどう見ているか」、「どうしてそのような見方をするのか」など、他者の意図や感情の理解が十分でないことから、友達の行動に対して適切に応じることができないことがある。 ➡体験的な活動を通して自分の得意なことや不得意なことの理解を促したり、他者の意図や感情を考え、それへの対応方法を身に付けたりする指導を関連付けて行う必要がある。 自閉症 :特定の光や音などにより混乱し、行動の調整が難しくなることがある。 ➡光や音などの刺激の量を調整したり、避けたりするなど、感覚や認知の特性への対応に関する内容も関連付けて具体的な指導内容を設定することが求められる。 ○自己を理解し、状況に応じて行動できるようになるためには、「(2) 他者の意図や感情の理解に関すること。」、「4環境の把握」等の区分と関連させる。
(4)	集団への参加の基礎に関すること	集団の雰囲気に合わせてたり、集団に参加するための手順やきまりを理解したりして、遊びや集団活動などに積極的に参加できるようになること。	障害のある幼児児童生徒 :見たり聞いたりして情報を得ることや、集団に参加するための手順やきまりを理解することなどが難しいことから、集団生活に適応できないことがある。 ➡会話の背景を想像したり、実際の場面を活用したりして、どのように行動すべきか、また、相手はどのように受け止めるかなどについて、具体的なやりとりを通して指導することが大切。 LD :言葉の意味理解の不足や間違いなどから、友達との会話の背景や経過を類推することが難しく、そのために集団に積極的に参加できないことがある。 ➡日常的によく使われる友達同士の言い回しや、その意味することが分からないときの尋ね方などを、あらかじめ少人数の集団の中で学習しておくことなどが必要。	ADHD :遊びの説明を聞き漏らしたり、最後まで聞かずに遊びを始めたりするためにルールを十分に理解しないで遊ぶ場合がある。また、ルールを十分に理解していても、勝ちたいという気持ちから、ルールを守ることができない場合がある。その結果、うまく遊びに参加することができなくなってしまうこともある。 ➡ルールをを少しずつ段階的に理解できるように指導したり、ロールプレイによって適切な行動を具体的に指導したりすることが必要。また、遊びへの参加方法が分からないときの不安を静める方法を指導する ○「2心理的な安定」の区分に示されている項目や、友達への尋ね方を練習するなど「6コミュニケーション」等の区分と関連させる。

4 環境の把握 感覚を有効に活用し、空間や時間などの概念を手がかりとして、周囲の状況を把握したり、環境と自己との関係を理解したりして、的確に判断し、行動できるようにする観点

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	保有する感覚の活用に関すること	保有する視覚,聴覚,触覚,嗅覚,固有覚,前庭覚などの感覚を十分に活用できるようにすること。 ※固有覚:筋肉や関節の動きなどによって生じる自分自身の身体の情報を受け取る感覚であり,主に力の加減や動作等に関係している感覚 ※前庭覚:重力や動きの加速度を感知する感覚であり,主に姿勢のコントロール等に関係している感覚		
(2)	感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること	障害のある幼児児童生徒一人一人の感覚や認知の特性を踏まえ,自分に入ってくる情報を適切に処理できるようにするとともに,特に自己の感覚の過敏さや認知の偏りなどの特性について理解し,適切に対応できるようにすること。 ※感覚:身体の内外的刺激を目,耳,皮膚,鼻などの感覚器官を通してとらえる働き ※認知:感覚を通して得られる情報を基にして行われる情報処理の過程であり,記憶する,思考する,判断する,決定する,推理する,イメージを形成するなどの心理的活動	自閉症 :聴覚の過敏さのため特定の音に,また,触覚に過敏さのため身体接触や衣服の材質に強く不快感を抱くことがある。それらの刺激が強すぎたり,突然であったりすると,感情が急激に変化したり,思考が混乱したりすることがある。 ➡不快である音や感触などを自ら避けたり,幼児児童生徒の状態に応じて,音が発生する理由や身体接触の意図を知らせるなどして,それらに少しずつ慣れていったりするように指導することが大切。 ADHD :注意の機能の特性により,注目すべき箇所がわからない,注意持続時間が短い,注目する対象が変動しやすいなどから,学習等に支障をきたすことがある。 ➡注意すべき箇所を色分けしたり,手で触れるなど他の感覚も使ったりすることで注目しやすくしながら,注意を持続させることができることを実感し,自分に合った注意集中の方法を積極的に使用できるようにすることことが大切。 LD :視知覚の特性により,文字の判別が困難になり,「め」と「ぬ」を読み間違えたり,文節を把握することができなかつたりすることがある。 ➡本人にとって読み取り易い書体を確認したり,文字間や行間を広げたりして負担を軽減しながら新たな文字を習得していく方法を身につけることが大切。 LD :書かれた文章を理解したり,文字を書いて表現したりすることは苦手だが,聞けば理解できたり,図や絵等を使えば効率的に表現することができたりする。 ➡本人が理解しやすい学習方法を様々な場面にどのように用いればよいのかを学んで,積極的に取り入れていくように指導することが大切。また,見やすい書体や文字の大きさ,文字間や行間,文節を区切る,アンダーラインを引き強調するなどの工夫があれば,困難さを改善できる幼児児童生徒もいる。したがって,幼児児童生徒一人一人の認知の特性に応じた指導方法を工夫し,不得意なことを少しずつ改善できるよう指導するとともに,得意な方法を積極的に活用するよう指導することも大切。	体の動かし方にぎこちなさのある生徒 :リコーダーを吹くなどの指先を細かく動かす活動や,水泳などの全身を協調して動かす運動を苦手とすることがある。これらの要因としては,固有覚や前庭覚の発達の段階等によるものが考えられる。 ➡個々の幼児児童生徒の発達の段階を把握した上で,現在できている動作がより確実にできるよう取り組むとともに,指や身体を,一つ一つ確かめながらゆっくり動かすようにするなど,発達の段階に見合った運動から行うようにすることが大切。また,こうした固有覚や前庭覚の発達を促す指導においては,幼児児童生徒に「できた」という経験と自信をもてるようにし,自己を肯定的にとらえることができるようにすることも大切。 ○「5身体の動き」,「2心理的な安定」及び「3人間関係の形成」と等の区分と関連させる。
(3)	感覚の補助及び代行手段の活用に関すること	保有する感覚を用いて状況を把握しやすくするよう各種の補助機器を活用できるようにしたり,他の感覚や機器での代行為的確にできるようにしたりすること。		
(4)	感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること	いろいろな感覚器官やその補助及び代行手段を総合的に活用して,情報を収集したり,環境の状況を把握したりして,的確な判断や行動ができるようにすること。	LD :視知覚のみによって文字を認識してから書こうとすると,目と手の協応動作が難しく,意図している文字がうまく書けないことがある。 ➡例えば,腕を大きく動かして文字の形をなぞるなど,様々な感覚を使って多面的に文字を認識し,自らの動きを具体的に想像してから文字を書くことができるような指導をすることが大切。このように,視覚,聴覚,触覚などの保有するいろいろな感覚やその補助及び代行手段を総合的に活用して,周囲の状況を的確に把握できるようにすることが大切。	
(5)	認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること	ものの機能や属性,形,色,音が変化する様子,空間・時間等の概念の形成を図ることによって,それを認知や行動の手掛かりとして活用できるようにすること。 ※概念:個々の事物・事象に共通する性質を抽象し,まとめ上げることによって作られるものであり,認知の過程においても重要な役割を果たすもの。	自閉症 :「もう少し」,「そのくらい」,「大丈夫」など,意味内容に幅のある抽象的な表現を理解することが困難な場合があるため,指示の内容を具体的に理解することが難しいことがある。 ➡指示の内容や作業手順,時間の経過等を視覚的に把握できるように教材・教具等の工夫を行うとともに,手順表などを活用しながら,順序や時間,量の概念等を形成できるようにすることが大切。 自閉症 :興味のある事柄に注意が集中する傾向があるため,結果的に活動等の全体像が把握できないことがある。 ➡一部だけでなく,全体を把握することが可能となるように,順序に従って全体を把握する方法を練習することが大切。 ADHD :活動に過度に集中してしまい,終了時刻になっても活動を終えることができないことがある。 ➡活動の流れや時間を視覚的に捉えられるようなスケジュールや時計などを示し,時間によって活動時間が区切られていることを理解できるようにしたり,残り時間を確認しながら,活動の一覧表に優先順位をつけたりするなどして,適切に段取りを整えられるようにすることが大切。 LD :左右の概念を理解することが困難な場合があるため,左右の概念を含んだ指示や説明を理解することがうまくできず,学習を進めていくことが難しい場合がある。 ➡様々な場面で見たり触ったりするする体験的な活動と「左」や「右」という位置や方向を示す言葉と関連付けながら指導して,基礎的な概念の形成を図ることが重要。	

5 身体の動き 日常生活や作業に必要な基本動作を習得し,生活の中で適切な身体の動きができるようにする観点

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	日常生活に必要な動作の基本となる姿勢保持や上肢・下肢の運動・動作の改善及び習得,関節の拘縮や変形の予防,筋力の維持・強化を図ることなどの基本的技能に関すること。		ADHD :身体を常に動かしている傾向があり,自分でも気付かない間に座位や立位が大きく崩れ,活動を継続できなくなってしまうことがある。 ➡身体を動かすことに関する指導だけでなく,姿勢を整えやすいような机やいすを使用することや,姿勢保持のチェックポイントを自分で確認できるような指導を行うことが有効な場合がある。 ○姿勢を保持することが困難なADHDのある幼児児童生徒に対しては,例えば,「2心理的な安定」や「4環境の把握」等の区分と関連させる。
(2)	姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること	姿勢の保持や各種の運動・動作が困難な場合,様々な補助用具等の補助的手段を活用してこれらができるようにすること。		
(3)	日常生活に必要な基本動作に関すること	食事,排泄,衣服の着脱,洗面,入浴などの身辺処理及び書字,描画等の学習のための動作などの基本動作を身に付けることができるようにすること。		LD :鉛筆の握り方がぎこちなく過度に力が入りすぎてしまうこと,筆圧が強すぎて行や枠からはみ出してしまうこと等,手や指先を用いる細かい動きのコントロールが苦手な者もいる。更に,上手く取り組めないことにより焦りや不安が生じて,余計に書字が乱れてしまうことがある。このような原因としては,目と手,右手と左手等を協応させながら動かす運動が苦手なことが考えられる。 ➡本人の使いやすい形や重さの筆記用具や滑り止め付き定規等,本人の使いやすい文具を用いることにより,安心して取り組めるようにした上で指導することが大切。また,自分の苦手な部分を申し出て,コンピュータによるキーボード入力等で記録することや黒板を写真に撮ること等,ICT機器を用いて書字の代替を行う事も大切。 ○落ち着いて自信をもち書字や描画に取り組むためには,「2心理的な安定」,「4環境の把握」の区分と関連させる。
(4)	身体の移動能力に関すること	自力での身体移動や歩行,歩行器や車いすによる移動など,日常生活に必要な移動能力の向上を図ること。		
(5)	作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること	作業に必要な基本動作を習得し,その巧緻性や持続性の向上を図るとともに,作業を円滑に遂行する能力を高めること。	ADHD :注意の持続の困難さに加えて,目と手の協応動作や指先の細かい動き,体を思った通りに動かすこと等が上手くいかないことから,身の回りの片付けや整理整頓等を最後まで遂行することが苦手なことがある。 ➡身体をリラックスさせる運動やボディーイメージを育てる運動に取り組みながら,身の回りの生活動作に習熟することが大切。 ADHD :手足を協調させて動かすことや微細な運動をすることに困難が見られることがある。 ➡目的に即して意図的に身体を動かすことを指導したり,手足の簡単な動きから始めて,段階的に高度な動きを指導したりすることなどが必要。また,手指の巧緻性を高めるためには,幼児児童生徒が興味や関心をもっていることを生かしながら,道具等を使って手指を動かす体験を積み重ねることが大切。障害の状態によっては,身体の動きの面で,関係する教科等の学習との関連を図り,作業に必要な基本動作の習得や巧緻性,敏捷性の向上を図るとともに,目と手の協応した動き,姿勢や作業の持続性などについて,自己調整できるよう指導することが大切。	自閉症 :自分のやり方にこだわりがあったり,手足を協調させてスムーズに動かしたりすることが難しい場合がある。また,他者の意図を適切に理解することが困難であったり,興味のある一つの情報のみに注意が集中してしまったりすることから,教師が示す手本を自ら模倣しようとする意識がもてないことがある。その結果,作業に必要な巧緻性などが十分育っていないことがある。 ➡一つの作業についていろいろな方法を経験させるなどして,作業のやり方へのこだわりを和らげたり,幼児児童生徒と教師との良好な人間関係を形成し,幼児児童生徒が主体的に指導者の示す手本を模倣しようとする気持ちを育てたりすることが大切。 ○「2心理的な安定」や「3人間関係の形成」等の区分と関連させる。

6 コミュニケーション 場や相手に応じて、コミュニケーションを円滑に行うことができるようにする観点

※ 対人相互の意思交換に関わる内容に限定されている。

項目	項目の内容	項目の説明	具体的な指導例と留意点	他の項目との関連例
(1)	コミュニケーションの基礎的能力に関すること	幼児児童生徒の障害の種類や程度、興味・関心等に応じて、表情や身振り、各種の機器などを用いて意思のやりとりが行えるようにするなど、コミュニケーションに必要な基礎的な能力を身に付けること。 ※コミュニケーション：人間が意思や感情などを相互に伝え合うことであり、その基礎的な能力として、相手に伝えようとする内容を広げ、伝えるための手段をはぐくんでいくこと。	自閉症 ：興味のある物を手にしたいという欲求が勝り、所有者のことを確認しないままに、他者の物を使ったり、他者が使っている物を無理に手に入れようとすることがある。また、他の人の手を取って、その人に自分が欲しい物を取ってもらおうとすることもある。 ➡周囲の者はそれらの行動が意思の表出や要求を伝達しようとした行為であることを理解するとともに、幼児児童生徒がより望ましい方法で意思や要求を伝えることができるよう指導することが大切。 言語発達に遅れのある幼児児童生徒 ：語彙が少ないために自分の考えや気持ちを的確に言葉にできないことや相手の質問に的確に答えられないことなどがある。 ➡幼児児童生徒の興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、ことばのやりとりを楽しんだりすることが必要。	自閉症 ：他の人への関心が乏しく結果として他の人からの働きかけを受け入れることが難しい場合がある。このような要因としては、興味や関心をもっている事柄に極端に注意が集中していたり、相手の意図や感情をとらえることが難しかったりする場合がある。 ➡個々の幼児児童生徒の興味や関心のある活動の中で、教師の言葉掛けに対して視線を合わせたり、幼児児童生徒が楽しんでいる場面に教師が「楽しいね」、「うれしいね」などの言葉をかけたりするなどして、人とやりとりをすることや通じ合う楽しさを感じさせながら、他者との相互的なやりとりの基礎的な能力を高める指導をすることが大切。 ○コミュニケーションの基礎的な能力に関する指導においては、一人一人の幼児児童生徒の実態に応じて、「3人間関係の形成」や「5身体動き」等の区分と関連させる。
(2)	言語の受容と表出に関すること	話し言葉や各種の文字・記号等を用いて、相手の意図を受け止めたり、自分の考えを伝えたりするなど、言語を受容し表出することができるようにすること。	意思が相手に伝わるためには、伝える側が意思を表現する方法をもち、それを受ける側もその方法を身に付けておく必要がある。そのように言語を受容したり、表出したりするための一般的な方法は音声や文字であるが、幼児児童生徒の障害の状態や発達の段階等に応じて、身振りや表情、指示、具体物の提示等非言語的な方法を用いる必要がある場合もある。	自閉症 ：他者の意図を理解したり、自分の考えを相手に正しく伝えたりすることが難しい者がいる。 ➡話す人の方向を見たり、話を聞く態度を形成したりするなど、他の人との関わりやコミュニケーションの基礎に関する指導を行うことが大切。その上で、正確に他者とやりとりするために、絵や写真などの視覚的な手掛かりを活用しながら相手の話を聞くことや、メモ帳やタブレット型端末等を活用して自分の話したいことを相手に伝えることなど、本人の障害の状態等に合わせて様々なコミュニケーション手段を用いることが有効。また、相手の言葉や表情などから、相手の意図を推測するような学習を通して、周囲の状況や他者の感情に配慮した伝え方ができるようにすることも大切。 ○相手の意図を受け止め、自分の考えを伝えることができるようにするためには、話し言葉や絵、記号、文字などを活用できるように指導するとともに、一人一人の実態に応じて、「2心理的な安定」、「3人間関係の形成」及び「6コミュニケーション」等の区分と関連させる。 ADHD ：思ったことをそのまま口にして相手を不快にさせるような表現を繰り返したりすることがある。このような要因としては、行動を調整したり、振り返ったりすることが難しいことや、相手の気持ちを想像した適切な表現の方法が身に付いていないことが考えられる。 ➡教師との個別的な場面や安心できる小集団の中で、相手の話を受けてやりとりする経験を重ねられるようにしたり、ゲームなどを通して適切な言葉を繰り返し使用できるようにしたりして、楽しみながら身に付けられるようにしていくことが大切。また、こうした言葉のやりとりの指導を工夫するほか、体の動きを通して気持ちをコントロールする力を高めること、人と会話するときのルールやマナーを明確にして理解させること、会話中の相手の表情を気にかけることなどを指導することが大切。 ○適切に自分の気持ちや考えを伝えるには、「2心理的な安定」、「3人間関係の形成」、「4環境の把握」等の区分と関連させる。

(3)	言語の形成と活用に関する こと	コミュニケーションを通して、事物や現象、自己の行動等に対応した言語の概念の形成を図り、体系的な言語を身に付けることができるようにすること。	言語発達に遅れのある幼児児童生徒 ：語彙が少ないため自分の考えや気持ちを的確にできないことや相手の質問に的確に答えられないことなどがある。 ➡幼児児童生徒の興味・関心に応じた教材を活用し、語彙を増やしたり、言葉のやりとりを楽しんだりすることが必要。 LD ：言葉は知っているものの、その意味を十分に理解せずに活用したり、意味を十分に理解していないことから活用できず、思いや考えを正確に伝える語彙が少ないことがある。 ➡実体験、写真や絵と言葉の意味を結び付けながら理解することや、ICT機器等を活用し、見る力や聞く力を活用しながら言語の概念を形成するように指導することが大切。	言葉の発達に遅れのある幼児児童生徒 ：コミュニケーションを通して適切な言語概念形成を図り、体系的な言語を身に付けるようにする。 ○「2 心理的な安定」、「3 人間関係の形成」等の区分と関連させる。
(4)	コミュニケーション手段の選択と活用に関する こと	話し言葉や各種の文字・記号、機器等のコミュニケーション手段を適切に選択・活用し、他者とのコミュニケーションが円滑にできるようにすること。	自閉症 ：言葉でのコミュニケーションが困難な場合、まず、自分の意思を適切に表し、相手に基本的な要求を伝えられるように身振りなどを身に付けたり、話し言葉を補うために絵カードやメモ、タブレット端末等の機器等を活用できるようにしたりすることが大切。また、順を追って説明することが困難であるため、聞き手に分かりやすい表現をすることができないことがある。 ➡簡単な絵に吹き出しや簡単なセリフを書き加えたり、コミュニケーションボード上から、伝えたい項目を選択したりするなどの手段を練習しておき、必要に応じてそれらの方法の中から適切なものを選んで使用できるようにすることが大切。 LD ：読み書きの困難により、文章の理解や表現に非常に時間がかかることがある。 ➡コンピュータの読み上げ機能を利用したり、関係性と項目を図やシンボルなどで示すマインドマップのような表現を利用したりすることで、コミュニケーションすることに楽しさと充実感を味わえるようにしていくことが大切。	
(5)	状況に応じたコミュニケーションに関する こと	コミュニケーションを円滑に行うためには、伝えようとする側と受け取る側との人間関係や、そのときの状況を的確に把握することが重要であることから、場や相手の状況に応じて、主体的にコミュニケーションを展開できるようにすること。	障害による経験の不足などを踏まえ、相手や状況に応じて、適切なコミュニケーション手段を選択して伝えたりすることや、自分が受け止めた内容に誤りがないかどうかを確かめたりすることなど、主体的にコミュニケーションの方法等を工夫することが必要。こうしたことについては、実際の場面を活用したり、場を再現したりするなどして、どのようなコミュニケーションが適切であるかについて具体的に指導することが大切。 LD ：話の内容を記憶して前後関係を比較したり類推したりすることが困難なため、会話の内容や状況に応じた受け答えをすることができない場合がある。 ➡自分で内容をまとめながら聞く能力を高めるとともに、分からないときに聞き返す方法や相手の表情にも注目する態度を身に付けるなどして、そのときの状況に応じたコミュニケーションができるようにすることが大切。 自閉症 ：会話の内容や周囲の状況を読みとることが難しい場合があるため、状況にそぐわない受け答えをすることがある。 ➡相手の立場に合わせた言葉遣いや場に応じた声の大きさなど、場面にふさわしい表現方法を身に付けることが大切。その際には、実際の生活場面で、状況に応じたコミュニケーションを学ぶことができるような指導を行うことが大切。	選択性かん黙 ：家庭などの生活の場では普通の会話はできるものの、学校の友達とは話すことができない。 ➡気持ちが安定し、安心できる状況作りや信頼できる人間関係作りが重要。その上で、幼児児童生徒が興味・関心のある事柄について、共感しながら一緒に活動したり、日記や作文などを通して気持ちや意思を交換したりする機会を多くすることが大切。また、状況に応じて、筆談などの話し言葉以外のコミュニケーション手段を活用することも大切。その際、幼児児童生徒が自信をもち、自己に対して肯定的なイメージを保つことができるような指導をすることが大切。 ○場や相手の状況に応じて、主体的なコミュニケーションを展開できるようにするには、「2心理的な安定」や「3人間関係の形成」等の区分と関連させる。 自閉症 ：援助を求めたり依頼したりするだけではなく、必要なことを伝えたり、相談したりすることが難しいことがある。このような要因としては、思考を言葉にして目的に沿って話すことや他者の視点に立って考えることが苦手なことなどが考えられる。また、コミュニケーションにすれ違いが生じることが多いことから、話す意欲が低下していることが考えられる。 ➡日常的に報告の場面をつくることや相手に伝えるための話し方を学習すること、ホワイトボードなどを使用して気持ちや考えを書きながら整理していくことが大切。また、こうしたコミュニケーションの基礎的な指導を工夫するほか、安心して自分の気持ちを言葉で表現する経験を重ね、相談することのよさが実感できるように指導していくことが大切。また、自分のコミュニケーションの傾向を理解していくことも重要。 ○適切に報告したり相談したりする力を育てるには、「2心理的な安定」、「3人間関係の形成」等の区分と関連させる。